研究資料日本文法

⑩修辞法編

修辞法編

編集
鈴木一彦
林巨樹

編集協力
飯田晴巳
猿田知之
中山緑朗

明治書院

編　者
鈴木　一彦（すずき　かずひこ）
林　　巨樹（はやし　おおき）

研究資料日本文法
第10巻　修辞法編
創業88周年記念
特別定価 2,800円

昭和60年1月25日　初版発行

東京都千代田区神田錦町 1-16
発行者　株式会社　明治書院
代表者　三樹　彰

長野県長野市中御所2-30
印刷者　大日本法令印刷株式会社
代表者　田中　忠

発行所　株式会社　明治書院
〒101　東京都千代田区神田錦町 1-16
電話　東京（292）3741（代）
振替口座　東京 3—4991

© K. Suzuki　1985　3381-26610-8305　製本　星共社

編集にあたって

言語に対する見方、言語観の相違が文法観の相違を生む。また、対象とする言語の違いによっておのずからそれに対する文法論上の処理も異なってくる。

江戸時代以前、日本の研究者は、日本語の本質を踏まえながら、それなりの文法体系を作り上げてきた。一方、十六世紀以来、西洋人の手によって、西洋文法の立場から日本語に対する文法的処理を行うといういくつかの成果が生まれ、それに従う日本人の学者の業績もあった。

右のような伝統的文法観、西洋文典の体系に基づいて整理された日本文典、両者の折衷によって作り上げられた文法理論など、さまざまなものの上に立って、明治以後、大槻文法・山田文法・松下文法・橋本文法・時枝文法などと称されるものをはじめとして、多くの文法学説が提示されて今日に至っている。

今回刊行される『研究資料日本文法』全十巻は、以上のような過去の文法学説をふり返りながら、語論・構文論・敬語論・修辞論など広い分野にわたって、新しい視点から、それぞれの論を展開することを一つの目的としている。外国語・方言の分野からの論考を加えたのも、広い視野から日本語を見直そうという立場によるものである。また、「研究資料」という見地から、文法に関する過去の資料のうち基本的なものを選んで、それに対する解説を付し、可能な限りの注解を施して読者の便を計った。加えて、文法上問題となる諸事象について新しく調査収集、整理したものを収載した。これは、これからの国語教育に役立つことをも企図している。さらに、各

巻の巻末には、これからの文法研究に資するために、それぞれの分野における基本的参考文献を出来る限り一覧し得るよう収載することにつとめた。

全巻を貫いている一つの考えは、文法学説史の整理という点にある。学説史を辿ることによって、文法について今日どのようなことを問題にすべきか、どのような研究課題があるかを知ることが出来ると思うからである。

十年ほど前に刊行された『品詞別日本文法講座』は語論を中心とした論考が主なものであり、資料編も生のままを提示するにとどまっていた。これを拡大充実し、前述の趣旨によって企画したのが今回の十巻である。

読者が、文法知識を整理し、みずからの目で対象としての日本語を見つめて、文法はこうあるべきだと悟る、そのために本書の論考および資料は資するところ大であろう。また、そのような観点で活用されることを願ってやまない。

鈴木一彦
林巨樹

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

研究資料日本文法 全10巻

編集 鈴木一彦・林 巨樹

創業八十八周年記念出版

特別定価 各二八〇〇円

過去の文法学説をふり返りつつ、語論・構文論・敬語論・修辞論等、各分野にわたって新しい視点から問い直す新シリーズ。過去の重要な基本資料も注解して紹介したほか、文法上の諸問題を提示解明。

好評配本中

全10巻の構成（毎月一冊配本）

▼内容見本呈

① 品詞論・体言編（名代名詞）発売

② 用言編(一)（動詞）発売

③ 用言編(二)（形容詞・形容動詞）発売！

④ 修飾句・独立句編（副詞・連体詞・接続詞・感動詞）発売！

⑤ 助辞編(一)（助詞）発売！

⑥ 助辞編(二)（助動詞）発売！

⑦ 助辞編(三)（助詞・助動詞辞典）第10回配本

⑧ 構文編 発売！

⑨ 敬語法編 発売！

⑩ 修辞法編 発売！

A5判 平均三三〇頁 箱入

明治書院

目　次

1　修辞と文法　林　巨樹　1

一　修辞と文法……2
二　レトリーカ……2
三　修辞法大要……4
四　文法からの逸脱……7
五　文法論と修辞……8
六　語彙論と修辞……12

2　和歌・俳句の修辞　甲斐睦朗　15

一　問題提起……16
二　「修辞」研究史……19
三　和歌の修辞……22
　知識としての和歌の修辞　理論化をめざす和歌の修辞　解釈から見た和歌の修辞
四　俳句の修辞……31

五　結びに代えて……36

3　道行文とその修辞　井手至　39

一　「道行」と土地讃美の意義……40
二　道行文の源流――上代韻文の道行文……42
三　道行文の修辞――院政・鎌倉時代の道行文……46
四　室町時代の道行文……50
五　近世の道行文――結び……52

4　謡曲の修辞　蜂谷清人　57

一　はじめに……58
二　能の台本としての謡曲……59
三　古歌・古詩の引用……65
四　名所・歌枕――例の名にし負う……67
五　序詞・掛詞・縁語など……70
六　おわりに……76

5　往来物・書簡文の修辞　橘豊　79

一　往来物の修辞……80

月次に配列する叙述法　語彙集型の叙述　目的別に分類する叙述法
候文と雅文との区別
二　書簡文の修辞……88
書簡文の形式　無心の手紙　書簡体の小説

6　明治の美文　進藤咲子　97

一　落合直文の新国文……98
二　『美文韻文花紅葉』など……103
三　美文作法書など……108
四　修辞学書と美文……110

7　普通体と丁寧体　加藤彰彦　115

一　はじめに……116
二　ござる・であります体……117
三　普通文体……120
四　だ　体……124
五　です・ます体……125
六　である体……127

8 現代文の修辞　中村　明　133

一 配列……134
二 反復……136
三 付加……137
四 省略……139
五 間接……141
六 置換……143
七 多重……144
八 摩擦……146

9 漢文脈と和文脈　松原純一　149

一 和漢混淆について……150
二 和漢混淆の華『平家物語』……150
『平家物語』の語法の三要素　『平家物語』に含まれる漢文脈の由来
『平家物語』に含まれる和文脈の由来　『平家物語』に含まれる記録体の由来
三 その他の中世の和漢混淆について……163
『方丈記』について　『徒然草』について
四 近世の和漢混淆について……165

近世の文学　儒学の興隆　国学の興隆
五　近代の和漢混淆について……168
明治前半の文語文　近代及び現代の口語文

10　近代以前修辞法研究の歴史

猿田知之

一　はじめに……172
二　上代の修辞法研究……174
推古朝までの修辞　天武期以降の修辞
三　中古の修辞法研究……180
漢文修辞法研究　和文修辞法研究
四　中世の修辞法研究……188
漢文修辞法研究　和文修辞法研究
五　近世の修辞法研究……203
漢文修辞法研究　和文修辞法研究
六　結びにかえて……219

資料Ⅰ　近世までの修辞研究書抄

〔猿田知之〕

文鏡秘府論（論対属）　済北集（答藤丞相）　禅儀外文集（序）　作文大体　226

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1 修辞と文法

林　巨樹

一　修辞と文法

修辞と文法との関係ないし修辞法・修辞学と文法論との関係は、いわば〃わかっているようで、随分と曖昧な〃関係である。辞書は言う。

しゅう・じ〔修辞〕①ことばを有効適切に用い、もしくは修飾的な語句を巧みに用いて、表現すること。また、その技術。②ことばを飾り立てること。また、ことばの上だけでいうこと。――・がく〔修辞学〕(rhetoric) 読者に感動を与えるように最も有効に表現する方法を研究する学問。アリストテレスの修辞学（弁論術）にはじまるという。美辞学。レトリック。――・ほう〔修辞法〕修辞に関する法則または手法。

ぶん・ぽう〔文法〕①〔言〕(grammar) 一言語の構成要素を形態と構文との見地から分析・記述する研究。普通、形態論と構文論とから成り、これに音韻論を加えることもある。文法論。文法学。②文章を構成するきまり。作文法。（いずれも『広辞苑』第三版）

これだけでも随分と示唆を与えられるし、一方で依然として曖昧だと言えるであろう。文法は或る言語の骨組みになぞらえられるような「ことばのきまり」ととらえようし、修辞の方は、個々の表現における〃皮肉〃をもった「ことばのすがた」を追求しようとしているのである。いくらか童蒙に立戻ってみると以上のようであり、修辞と文法、文法と修辞との関係は、そんな観点から検討されることになる。

二　レトーリカ

言語表現は「ことばのきまり」だけで成立つのでなく、実際には「ことばのすがた」によって成立つ。だから文法と修辞、修辞と文法の関係は不即不離のはずであるけれど、そうして事実としては「ことばのきまり」と「ことばのすがた」とは一体のものであるけれど、わが国の場合、この事実に気付くのはそう早いことではない。

ラテンに至ては、此方語音に相通ぜずといふ所なし。されば諸国の人、これを学びずといふものあらず、又諸国用ゆる所の字体、二つあり。一つにラテンの字、一つにイタリヤの字、其ラテンは、漢に楷書の体あるがごとく、イタリヤの字は漢に草書の体あるに似たり。其字母、僅に二十余字、一切の音を貫けり。文省き、義広くして、其妙天下に遺音なし。（其説に、漢の文字万有余、強識の人にあらずしては、暗記すべからず。しかれども猶ッ声ありて、字なきあり。さらばまた多しといへども、尽さざる所あり。徒に其心力を費すのみといふ。）其これを習ぶの学、ガラアマテイカといふは、梵に悉曇あるがごとく、（其声音を習ぶ学なり。）レトーリカといふは、漢に文章あるがごとし。（其語をつらねて、言を記するの学なりといふ也。）此ノ余、天文、地理、方術、技芸の小しきに至る迄、悉ク皆ナ学あらずといふ事なしといふ。

というのは、新井白石『西洋紀聞』の一節である。宝永六年（一七〇九）の暮に白石が最後の切支丹ヨワン・シロウテ（Juan B. Sidotti）を小石川切支丹牢に訪れて、吟味した記録の数行である。ガラアマティカはグランマである、文法である。レトーリカはレトリックである、修辞である。もとより、ここで言う文法と修辞とは、今日の文法と修辞と全き重なりを示すわけではないが、「言語を習ぶ学」として二つの部門があること、それが文法と修辞であることを、白石は聞き取ったのである。恐らくそれまで国文・漢文を通しては一つのものと認識されていた分野に関して、新しい見方を得たのである。一方に或る言語のありのままの様態、その仕組み（constitution この英語が「憲法」をも意味しているのは示唆的だ）を整理し記述しようとする「文法」があり、一方にその言語の中で、一層整った、さまざまの変化を包含した、具体的で自由な表現を求める「修辞」があるというように。

三　修辞法大要

白石がシロウテから聞き取ったレトーリカは「其語をつらねて、言を記するの学」であった。〃文辞を修飾して麗しくする〃（『大字典』語釈）というよりも、表出することそのものであり、話す法をも指していたであろう。このことはレトリックの始原ギリシアにおいて、そうであった（最近の著作としては、広川洋一『イソクラテスの修辞学校』が詳しい）。

わが修辞は、古代歌謡の中に胚胎し、著しく中国の影響をうけて発達したものと理解されている。この間の事情は、修辞法という名目に置き換えてみれば、次のように整理できるであろう。

修辞法は、今日、詩文を作るに際して、どのようにことばを運用すれば、適切に、効果的に、美しく表現できるか、の方法と理解されている。これを理論的に体系づけようとする学を修辞学または美辞学という。レトリックの訳語としての修辞法（修辞学）は明治以降の紹介によるが、

㈠日本の場合、中国の文芸批評の一としての詩病（い）説や、いわゆる対句法・四六体等を紹介した『文鏡秘府論』から斎部広成の『歌経標式』など広い意味での修辞を説いたものは古くからあり、藤原公任『新撰髄脳』以下の歌論書・連歌論などもこれに加えてよく、枕詞・序詞・縁語・掛詞などの技法やその研究も広義の修辞法に加えてよいであろう。

㈡狭義に修辞法（修辞学）というのは、ギリシア語レトリカ（弁論術）に発し、アリストテレスほかが、弁論における有効な語句の用い方、文章作成の態度、文章の性格・目的に応じた作成法等を論じたのに始まり、複雑な発達をとげたものである。日本には、菊池大麓訳『修辞及華文』（チェンバー原著、明治一二年）を初めとして、武島又次郎

『修辞学』（明治三一年）、島村抱月『新美辞学』（明治三五年）以下で紹介され、明治の新文芸に影響した。集大成ともみられる五十嵐力『修辞学大要』（大正一二年）ほかに説かれた修辞法の内容は、おおむね次のようである。

直喩法（比喩中「あたかも…のごとし」と他の何かにたとえる方法）
隠喩法（比喩中、「…のごとし」とせずに直ちにたとえをもって言う方法）
提喩法（寓言法。比喩中、暗示的にものに託して述べる方法）
活喩法（擬人法。無生物や人でないものを人にたとえて述べる方法）
結晶法（擬物法。生物を無生物化して述べる方法）
問答法（対話法）
挙例法（抽象的な事柄を具体的に述べるために、例をあげる方法）
誇張法（事物を実際よりは誇張して表現する方法）
現写法（過去の事、将来の事を、現在目前のように述べる方法）
対照法（相反する事がらを並べて述べる方法）
抑揚法（まず抑えて後に揚げ、あるいはまず揚げて後に抑える方法）
換置法（一度用いた語句をすぐ撤回して、さらに他の適当な語句で述べる方法）
括進法（前に言った事をくくりたばねて叙述を進める方法）
列叙法（多くの事物を述べるに、くくることなく、同等の重みあるように述べる方法）
詳悉法（すきまなく述べようとする方法）
希薄法（あてつけに全部を言うのでなく、別語をもってしたり部分を指したりする方法。朧化法の一つ）
美化法（美しいものに装って言う方法。朧化法の一つ）

曲言法（遠回しに言う方法。朧化法の一つ）
引用法（成語、故事を引いて説得力を増す方法）
隠引法（古言故事を文中に編み込む方法）
縁装法（縁故ある事物を添えて伝達力を増す方法）
挙隅法（一隅をあげて全体を察せしめる方法）
側写法（依他法。正面から述べず、側面から述べる方法）
省略法（詳悉法の反対に、簡潔を期して余韻あらしめる方法）
反言法（ことさらに反対のことを述べて、効果あらしめる方法）

以下、皮肉法・設疑法・驚句法・反覆法・対偶法（対句法）・擬態法など数多いが、省略に従う。これらに、詩における押韻、和歌・俳諧における枕詞・序詞・掛詞・縁語の類、季語、切字などを加えて、旧修辞学と呼ぶことができよう。

このような旧修辞学は、㈠論述をわかりやすくするための比喩、㈡文章の主題または段落の小主題を明確にする法、㈢文章構成の方法、㈣文章の論理性に関する方法、㈤和歌俳諧に由来する修辞に要約されようが、これに対して、「文章をととのえ飾るという意識から発していた旧修辞学は、近代における文章観の変化によって崩壊した。近代の文章は、あらゆる意味で自由であろうとしたからだ」としながら、「しかし、目的にかなった的確な文章を書くため、という意味から新しい修辞学が求められている」とする立場（波多野完治『文章心理学入門』ほか）が起こり、今日に及んでいる。

谷崎潤一郎『文章読本』（昭和九年）を初めとして、戦前・戦後のそれこそ汗牛充棟の文章作法書は、旧修辞学を離れ、文学的文章だけでなく、実用文をも含めて、いかに書くべきかという意味で、広義の修辞法を論じていると言っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com